



A Quantitative Constructional Approach to Converbal Motion Constructions in English

Morishita, Yuzo

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2014-03-25

(Date of Publication)

2015-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6014号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006014>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

和文要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

A Quantitative Constructional Approach to Converbial Motion Constructions in English

(英語における副動詞移動構文に対する数量的構文文法からのアプローチ)

氏 名 : 森下裕三

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名	(主)	松本曜教授
	(副)	岸本秀樹教授
	(副)	菱川英一教授

(注) 4, 000字程度 (日本語による)。必ずページを付けること。

1章: 導入

本研究では、英語における副動詞 (*-ing* 形の動詞) を含む3種類の移動構文の形式と意味の関係について Goldberg (1995) らによって提唱されている構文文法という理論に基づいて議論する。British National Corpus という総語数が1億語にも及ぶ大規模コーパスを用いた数量的・統計的な手法によって、各構文の典型的な意味を緻密に記述することに成功した。そうした詳細な記述に基づき、各構文の機能的な違いを明らかにすることで、語よりも大きな「構文」という単位的重要性を主張する。

2章: 理論的背景

動詞が取る項の数や種類は、動詞の意味によって決まると考える立場がある一方で、抽象度の高い形式と意味のペアである「構文」の存在を強調する立場として Goldberg (1995) らが提唱する構文文法という理論がある。この理論では、項の種類と数を決めるのは動詞ではなく構文であると考えられる。構文という単位を認める別の理由として、それぞれの構文ごとに機能的中心性が異なるという点が挙げられる。つまり、ある構文と別の構文とは必ず意味的・機能的に異なっているという仮説がある。

このような、各構文が意味的・機能的に異なるという仮説は、コーパス頻度を基にした統計的データから検証可能であると考えられる。つまり、統計的に明らかにある構文と別の構文とで語の共起関係や頻度分布が異なることを示すことで、構文という単位を認める新しい根拠を提示できるのである。

さらに Role and Reference Grammar で主張されている述語同士の結合度の差に基づく、形式と意味のペアに注目する。この理論では、述語と述語が直接的な結合をする場合 (内核連接) と、述語とその項からなる中核と中核が結合する場合 (中核連接) と、中核に周辺的要素が付加された節同士が結合する場合 (節連接) を区別する。このような理論では、文法的要素間での結合度の違いに基づく意味と形式のペアが想定されている。結合の程度が異なる複数の構文について意味的・機能的な違いを詳細に記述することは、Role and Reference Grammar での仮定がどの程度妥当なのかを検証することにもなる、さらに、Goldberg らとは異なる視点から構文を観察することによって、構文文法という理論の発展にも繋がる。

3章: 副動詞構文

1つの節の中に複数の動詞が生じる現象は、これまでに動詞連続構文について多くの議論がなされてきた。しかし、動詞連続構文と同様に、接続詞などを持たずに複数の動詞が1つあるいは複数の節に現れる現象が他の構文でも見られる。

こうした構文には非定形で副次的な機能を担う動詞が生起するとされ、こうした動詞は Haspelmath (1995) によって副動詞と呼ばれている。副動詞を含む構文を副動詞構文と定義し、まずは、動詞連続構文と副動詞構文との類似点と相違点について先行研究で議論されている点をまとめた。動詞連続構文では、時制・相・モダリティなどが、それぞれの動詞の間で共有されているのに対して、副動詞構文には複文のものもあるため、こうした一般化はなされない。

また、副動詞構文のうち、単文だと考えられるものは、屈折をする主動詞と非定形の副動詞とで複雑述語を形成する。こうした構文は様々な言語に見られ、それらの中には移動事象を表すものが少なくない。

しかし、多くの言語に見られる副動詞構文であるが、移動事象以外を表すものもあり、副動詞自体の意味が多義的なのか曖昧的なのか研究者の間で議論に上がることもあった。Role and Reference Grammar のように形式的な側面と意味的な側面との間に類像的關係を想定する理論に基づけば、多様な意味を担うと考えられてきた副動詞は実は多義的ではなく、曖昧的であると考えられる。

4 章：副動詞移動構文

John came running towards me. (ジョンが私のところへ走ってきた) といった、人称や時制によって屈折する移動動詞に-ing 形の動詞が後続し、さらに前置詞句などが続くような表現について議論する。

まず、このような文が複文ではなく単文であることを X'理論に基づいて分析する。-ing 形の動詞に後続する前置詞句は必ずしも主動詞の項だと考えられるわけではなく、She went crashing into him. (彼女は彼にぶつかっていった) のように-ing 形の動詞の項だと考えられるものもあり、複文のように見えるものもある。しかし、Huang (1982) による付加詞島の制約に基づくテストにより、前置詞句が-ing 形の動詞の項だと考えられるような例でさえ単文であることを明らかにした。さらに、統語的なテストによって、この構文に生起する 2 つの動詞が V よりも小さな単一の複雑述語を形成することをも示すことができた。

続いて、大規模コーパスから抽出した副動詞移動構文の全 1130 例を分析した結果、'go' や 'come' といった直示的移動動詞に後続する-ing 形の動詞には running などの移動様態動詞が共起しやすいのに対して、'run' や 'stagger' といった移動様態動詞に後続する-ing 形の動詞には screaming などの活動動詞が共起しやすいことが明らかになった。この動詞の種類による共起関係の違いは統計的にも有意なものである。また、Stefanowitsch and Gries (2003) が提唱する Collostructional Analysis と呼ばれる統計的手法によって主動詞には無標な 'go' よりも有標な 'come' の方が生起しやすいという事実も示すことができた。さらに、John ran to the store. (ジョンはその店まで走った) のような移動構文と経路表現の典型性についての比較を行った。その結果、移動構文では to のような着点を表す表現が多く見られるのに対して、副動詞移動構文では、across などの中間経路を表す表現が多く見られた。経路表現に関する 2 つの構文における頻度分布の違いは統計的にも有意である。また、副動詞構文に生起する 'come' や 'go' の経路表現の頻度分布が、移動構文に生起する 'come' や 'go' よりも、移動様態動詞と共起する経路表現の頻度分布に近いということも多変量解析の結果から明らかになった。このような観察によって、副動詞移動構文は移動構文とは機能的な棲み分けがなされているという事実が捉えられた。

さらに動詞の項構造に基づいて、副動詞構文に 4 つの下位構文を設定し、それぞれの下位構文から、最も抽象度の高い構文が形成される過程を用法基盤モデルに基づいて検証した。

5 章：目的移動構文

Mary went shopping at the shop. (メアリーが店に買い物に行った) のように、直示的移動動詞である 'go' や 'come' に-ing 形の動詞が後続するような構文について議論する。

まず、X'理論に基づく統語テストによって、目的移動構文の構成素構造を明らかにする。いくつかのテストの結果、直示的移動動詞と-ing 形の動詞が複雑述語を形成することが示した。このように複雑述語を形成することで、事象の終結を明示せず、意図を持ちどこかへの移動を経て目的を実行するという複雑な事象を表すことが可能になり、それゆえに、経路を表す項を取ることができなくなり、主語が人間でなければならないという個々の動詞には無い制約が生じる。

Levin (1985) などは、語の意味が統語的な振舞いに反映されると考える。このような意見に従うと、経路の項が現れない目的移動構文に生起する 'go' や 'come' の意味は、Mary went to the shop. (メアリーは店に行った) のような経路の項が現れる移動構文に生起する 'go' や 'come' の意味と異なることになる。しかし、構文文法では、項構造を決めるのは構文の役割だと考えるため、'go' や 'come' が経路の項を取ることができるかどうかという違いがあっても、動詞の意味が異なるとは限らないという立場を取る。Quine (1960) や McCawley (1969) らによって提案されたテストを用いることで、目的移動構文と移動構文に生起する 'go' や 'come' の意味の違いは認められないことを検証し、構文文法による分析の妥当性を示した。

さらに、British National Corpus を用いて全 1,650 例の用例収集を行い分析した結果、目的移動構文では圧倒的に 'go' の頻度が高いということが明らかになった。さらに、多変量解析を用いた統計的な分析から 'go' と共起する -ing 形の動詞には shopping や swimming など気晴らしになるような行為を表すものが多いのに対して、'come' と共起する -ing 形の動詞

6 章：副動詞使役移動構文

Mary sent him scurrying into the room. (メアリーは彼に走って部屋まで行かせた) のように、使役移動動詞に名詞句および-ing 形の動詞、さらに経路を表す前置詞句などが後続するような構文について議論する。統語的なテストによって、副動詞使役移動構文においても 2 種類の動詞が複雑述語を形成することを明らかにする。同時に、分詞構文などのような複文ではなく単文であることも検証する。

続いて、コーパスから得られた 303 例の用例を分析したところ、この構文では 'send' が最も好まれるということ、使役の種類が開始時使役か継続的使役かによって-ing 形の動詞の生起傾向に違いが見られることを明らかにした。また、副動詞移動構文と同様に、生起頻度の高い-ing 形の動詞には running などの目立った動詞が多いことが明らかになった。さらに、Collostructional Analysis によって統計的にも、この構文における使役の種類は開始時使役である傾向が強いことなどを検証した。この結果は、継続的使役が多く見られる使役移動構文と異なるものである。さらに、これら 2 種類の構文は経路に関しても異なる性質が見られる。副動詞使役移動構文では、中間経路を表す経路表現が多く見られるのに対して、使役移動構文では、着点を表す経路表現が多く見られる。このような違いから、両構文は機能的な棲み分けをしていると結論づけることができる。

7 章：全体の考察

具体的に 4 章から 6 章までで具体的に分析、考察を行ってきた現象から一般的な議論を展開する。具体的な議論として、i) -ing 形の動詞が多義的ではなく曖昧的であり、ii) 項構造は必ずしも動詞の意味のみによって決められるのではなく、構文が担う場合もある。iii) RRG による通言語的な連接

関係と意味関係との間に見られる一般化が概ね妥当であるという理論の検証も行った。さらに vi) Goldberg (1995) による単一経路制約を再検討し、v) Haspelmath (2008) が提起した頻度と類像性に関する問題についても意義を唱えた。そのうえで、コーパスによる頻度情報は言語の類像性を説明するものではなく、各構文の機能的・意味的を記述するためのものであるべきだとの主張をした。vi) その際、相対頻度や統計的な指標といった粗頻度にかわる有効な指標であるという点についても議論した。

8 章：結論

本研究で扱った構文は、どれも文法書等に記載されているものの、十分な理論的考察がなされてこなかったものばかりである。そして、網羅的なコーパス調査からも明らかなように、British National Corpus のような 1 億語にも及ぶ大規模コーパスでさえ 2,000 例に満たない。これまで多くの研究者によって分析されてきた構文がはるかに多いことを考えると、本研究で扱った現象がいかに珍しいものであるかが分かる。しかし、それゆえに、個々の構文の用例を網羅的に収集することが可能となり、1 つ 1 つの用例に目を配ることによって全体的な傾向だけでなく、特異な現象の記述までも十分に行うことができた。

またコーパスから得られた用例を統計的な手法によって分析することで、粗頻度に基づくものよりも説得力をもった結果をも提示することが可能となった。こうした結果を基にした分析は、英語における周辺的な文法現象の記述にとどまらず、緻密な記述に基づく理論的な貢献にも寄与するものである。

論文審査の結果の要旨

氏 名	森下裕三
論文題目	<i>A Quantitative Constructional Approach to Converb Motion Constructions in English</i> (英語における副動詞移動構文に対する数量的構文文法からのアプローチ)
要 旨	本論文は、Goldbergの構文文法を理論的枠組みとして、またコーパス言語学を方法的枠組みとして用いて、英語の「副動詞移動構文」の性質について研究したものである。扱った「副動詞移動構文」には三種類があり、(1a-c)にその例を示す。 (i) a. John came running towards me. (副動詞自律移動構文) b. Mary went shopping at the store. (副動詞目的移動構文) c. Mary sent him scurrying into the room. (副動詞使役移動構文) 提出論文では、統語的なテストによってその句構造や項構造を明らかにするほか、British National Corpus (以下BNC)を用いて、これらの構文の性質を数量的に分析している。以下では、各章の内容を紹介しながらその主張を検討する。 2 章では、本論文の理論的背景が語られている。本論文ではGoldberg (1995; 2006) による構文文法を採用すると述べている。Goldberg による構文文法では、動詞の項構造と独立したものとして、構文にも項構造を認め、さらに動詞の意味に多義を認めずに、構文が担う役割を重視する。本論では、この立場をBoas (2003) による構文文法や、Levin and Rappaport Hovav (1995) らの理論と比較して提示している。さらに、コーパスを利用した数量的分析を採用し、特にStefanowitsch and Gries (2003)によって提唱されたCollostructional Analysis という手法を取り入れた分析を行うとしている。 3 章では、副動詞構文の類型論的性質が検討されている。副動詞(Converb)とは付加詞的な機能を果たす非定型動詞を指す用語であり、類型論的な研究で使われてきたが、本研究では英語の分詞についてこの用語を使うとしている。 4 章、5 章、6 章は本論文の中核をなすものである。まず4章では副動詞自律移動構文が扱われる。本論文ではまず、諸統語テストなどによって、本構文が単文であるとし、さらに、この構文に生起する2つの動詞はV'よりも小さな単一の複雑述語を形成すると主張している。続いて、BNC から抽出した副動詞自律移動構文の用例を分析した結果から、主動詞と非定型動詞の組み合わせとして、直示動詞 (e.g., go やcome) と移動様態動詞 (e.g., running) の組み合わせ、および、移動様態動詞 (e.g., run) と活動動詞 (e.g., screaming) の組み合わせが起りやすいこと、また、Collostructional Analysis により、go よりもcome の方が本構文に生起しやすいことを明らかにしている。さらに、副動詞自律移動構文をJohn ran to the storeのような自律移動構文と比較し、二つの構文の間で動詞や経路表現に見られる頻度分布が異なることを明らかにしている。さらに共起する経路表現のタイプにおいて、副動詞自律移動構文は、移動様態動詞が使われた自律移動構文と似た結果を示すことを明らかにしている。以上のような本章は、一部、統語テストの使い方と統計分析に課題があるものの、おおむね健全な議論が展開されていると言える。 5章では副動詞目的移動構文について考察している。まず、諸統語テストによって、本構文が単文であることを明らかにする。次に本構文には、i) 事象が非終結的でなければならない、ii) 主語が人間や高等
主査記載氏名・印	松本 曜

な動物でなければならない、iii)経路の項が取れないという制約があるとする。主語に関する制約は、この構文によって表される事象が複雑で計画性を伴うものであることから導き出されたとする。また、自律移動構文と異なり、本構文で直示動詞が経路の項を取ることができないことについて、先行研究で本構文の直示動詞の意味が漂白化しているからだという指摘があるが、本論文では個別義の認定に関するテストを用いて、本構文の直示動詞の意味は、自律移動構文の直示動詞の意味と同じであることを示している。また、BNC を用いた検索結果から、-ing 形の動詞の中にはgo と共起しやすいものと、come と共起しやすいものがあることも明らかにしている。以上のような本章は、コーパスにおける用例の詳細な分析から、この構文の性質を以前より正確に明らかにすることに成功していると言える。

6章は副動詞使役移動構文を扱っている。まず、著者は再帰代名詞テストなどによって、本構文が単文であることを示している。続いてBNC から抽出した用例を分析し、主動詞の使役のタイプによって、共起しやすいing 形の動詞が異なることを明らかにしている。すなわち、開始時使役の場合には、移動様態動詞が-ing形の動詞として共起しやすく、継続的使役の場合には、活動動詞が-ing 形の動詞として共起しやすい。さらに、使役移動構文と副動詞使役移動構文との比較も行い、使役移動構文では継続的使役が多いのに対して、副動詞使役移動構文では開始時使役が多いことを明らかにしている。また経路表現に関しても、使役移動構文では着点を表す句が生起しやすいのに対して、副動詞使役移動構文では、中間経路を表すものが生起しやすいとする。さらに、頻度情報に基づいて抽象的な構文が作り上げられるプロセスについても考察し、動詞の項構造と構文の項構造に基づく分析を行っている。この章は、今までほとんど取り上げられて来なかった構文を扱っており、多くの新しい事実を掘り起こして分析を行っている点で評価される。

7章では、4,5,6章を踏まえて、一般的な言語学的課題を検討している。まず、本論文で扱った構文において-ing 形の動詞が主動詞に対して持つ意味関係が（移動様態）、（付随的動作）、（目的）に限られることとは、これらの文が単文であることと相関があるとして、文法の類像性を支持するものだとしている。また、4章および6章で議論した、意味的に似た構文に生起する動詞や経路表現に関する頻度分布の違いは、構文にはそれぞれの「立ち位置」があることを示すとし、構文はすべて意味機能が異なるとするGoldbergの説を支持するとしている。最後に、コーパスにおける頻度の問題に関連して、構文の特性はその構文だけを見て分かるものではなく、比較による相対頻度を考察することが重要であるとしている。このうち、類像性と「立ち位置」に関する主張は健全なものと思われる。なお、4～6章の内容からすれば、動詞の多義性など、構文文法内の争点に関する議論も可能であったように思われるが、その議論は含まれていないのは残念である。

以上見たように、本論文は理論的な考察と実証的な考察の両方において優れた点を有する意欲作であると言える。今まで考察されて来なかった構文の性質についても果敢に挑戦し、コーパスにおける用例の綿密な検討から新しい事実を掘り起こしている。さらにそれを構文文法の枠組みで記述するのに成功している。議論の明確さと英文の正確さ、および議論の深化の点で若干の問題があるが、全体として優れたものであることには疑いがない。

以上に鑑みて、本審査委員会は全員一致で論文提出者・森下裕三氏が博士(学術)の学位を授与されるに足る資格を有すると判断した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	松本 曜 印	副 査	教授	岸本 智 阿
副 査	教授	リチャード・ハリソン 印	副 査	国文学研究資料館 教授	スウィー 快-郎
副 査	准教授	田中 真一			